神谷勇治（６８回）インタビュー記事

２０２１年８月１６日

広報委員　　堀米　明

校友である神谷勇治博士（６８回）が令和３年度日本学士院賞を受賞されました。校友会報１４７号TOPICSでおしらせしましたが、今回ご本人に直接インタビューさせて頂きました。

天皇皇后両陛下の御臨席を仰ぎ、日本学士院第１１０回及び第１１１回授賞式が６月２１日に行われました。（昨年の第１１０回はコロナ禍のため延期となったそうです。）コロナ緊急事態宣言の出た授賞式の翌月Zoomミーティング形式でインタビューを行いました。

博士の研究については校友会報１３４号（２００７年１０月）「フロントランナー」で紹介させて頂きましたが、その時は、植物の生長ホルモンである「ジベレリン」の働きを制御する新酵素（環化酵素）の発見という生物工学の世界的な魁となる研究成果でした。

それから１０年さらに、光の方向に茎が伸び、根が重力の方向に伸びていくことに関わる植物ホルモン「オーキシン」の生合成経路を解明しました。これらの業績は農業・園芸の品種開発等に大きく貢献し日本学士院賞受賞理由となりました。

現在は理化学研究所の名誉研究員として後進の指導にあたり、最前線の研究者からは退いていらっしゃいますが、同期（６８回）の竹岸章さんが立ち上げた「特定非営利活動法人川崎寺子屋食堂」の副理事長をされています。母子家庭等で家族団らんの食事がとれない子供たちと一緒に食事をし、得意の生物の勉強も教えています。

私たちが母校にいたころは貧困家庭の子供たちを意識することはなかったと思いますが、２０１４年のOECD (経済協力開発機構) の報告によると、日本の子供の貧困率は、先進国３４か国の中で１０番目に高い数値だそうです。竹岸さんの住んでいる川崎市は「ひとり親家庭」が多く、特に今回のコロナ禍では学校に行けない、給食が頂けないという子供たちに切実な問題が起きてしまいました。

いわゆる孤食は子供たちの成長期に必要な栄養のバランスが崩れ、メンタル面でも集中力の低下等問題が生じ、学業成績にも影響が出てきます。経済的な理由やその他家庭の事情によって学習に適する場所がなくて自宅学習が困難であったり、大人が深夜までそばにいないなどの理由によって学習習慣が身についていない子どもたちへの支援が必要です。

サステナブルな日本の未来を担う子供たちに食事を確保し、勉学の指導をするという２つの面からボランティアベースで支援することが「寺子屋食堂」の理念であり、さらに同じ志を持つ支援団体を各都道府県に広めていこうと、「寺子屋食堂」の運営ノウハウも伝えていこうと活動しています。まだまだ「フロントランナー」の神谷博士です。

川崎寺子屋食堂では、母校の瀧澤雄一郎先生（物理７２回）と齋藤俊和先生（化学７２回）も参加されており、理系の先生方は母校で固められています。英語は英国や米国に留学中の学生ボランティアが担当しており、コロナ禍でのオンライン講習ではZoomの背景画面はイートン校の校舎とか、まさに英国にいるようなグローバルな授業風景となっているそうです。

博士が研究者になったきっかけは、中１の時に理研に見学に行き、研究を行うことの素晴らしさに感動したことだと１４年前のインタビューで伺ったのですが、実際に研究者になってからも感動の連続だったようです。研究者は前人未踏の世界にチャレンジしなければ大きな成果を得られないものなのです。立ちはだかる障壁がどんなものかわからない、ハイリスクハイリターンの世界です。

「壁に挑んで乗り越えられず諦めるような気持では研究者として全うできません。でも研究をし続けるためには、成果のでそうな研究もリスクヘッジとして持っておくという戦略も必要です。行き詰ったときには他の分野の研究者と情報交換するとブレークスルーすることがあります。研究者のネットワークを持つことが大事です。」

「早稲田中高は受験校ではあったけれど、多感な少年時代を中高一貫の６年間、恵まれた環境で過ごせたと感謝しています。自由な学校生活で色々な友だちと出会うことができました。同級生だった安孫子正さんは中学生の時から歌舞伎に傾倒していて、今は松竹副社長を経て５月に歌舞伎座社長に就任しました。古典芸能の世界だって、コロナ禍のなか、現代の芸能とは何か前人未踏のチャレンジをしているのは研究者と同じです。」母校は多彩な生徒がそれぞれの道を究めるインキュベータだったと言えるようです。

「自分は今、チャレンジングな現役研究者からリタイアして、次の世代に自分の経験を伝えていくことに人生の目的を見出しています。科学者の社会的責任は何か、自分のために何かをするより、他の人ができないことを助けるなら、ずっと人生の目的を持ち続けられます。さらに日本の将来を担う次の次の世代に適切な教育を受けさせ、チャレンジのチャンスを与えるという想いで寺子屋食堂を続けています。」

常に初心であるという意識で、人生の節目節目で「花鏡」チャレンジしていく、世阿弥の「花鏡」にある「是非の初心忘るべからず。時々の初心忘るべからず。老後の初心忘るべからず。」を思い起こさせるインタビューでした。

以上

.